

終りに西郷先生の御言葉を記して置きませう。

「道は天地自然の道にして人は之を行ふものなり

故に天を敬するを以て目的となす。

天は人も我も同一に愛す。故に我を愛する心を以て人を愛すべし」。

緑濃く滴らんばかりなる松の下、瑞々しく青草の茂れる上に坐して 失禮。

夏の旅

第五學年甲組 中道龍夫

燃へるやうに熾烈な外光が八月の野に満ちている
数多い青螺が紺青の海面に浮んでゐる、白雲の峯
芳烈な潮の香、波の音、それらは總てなつかしい
夏の思ひ出となつた。港の夜の海沿ひの宿の二階
に疲れた軀を投げ出してソツと手摺りに靠れて眺
め入つた暗い港の夜の光と色、あの半島へ通ふ小
さなボロ汽船の青い舷燈が亡霊のやうに不思議な
色に見えた、向ひ島の山裾に海に落ちんとする星
のやうな灯光は美はしかつた。青い港の夜は乏し
い色彩と音楽を秘して更けて行つた。旅の疲れと

見知らぬ町の憧憬に燃えた心は容易に眠りを誘ふ
やうにもなかつた、私はたゞウト／＼とし乍ら新
らしい麻の香のブン／＼する蚊帳の中で枕の下に
濤聲を聞きながら更けゆく島の静寂と沈黙に思ひ
を延べやうとした。こうした旅の情感はあまい哀
愁とともに私は旅から旅へここかしこ彷徨うて
ゐる間私の心からは離れなかつたのである。
八月の或る日私は其日の朝四日市の阜頭から紀州
通ひの僅か百何十噸といふ小さな汽船に身を投じ
て海女の唄が波間に漂ふ志摩の海岸へ旅立つた。
伊勢の内海の静穏な波が若松、神戸、白子などい
ふ漁村の渚に白く打ち上げてゐる。松原の續く海
邊のここかしこには點々として漁村が散在してい
る。やがて津のみなどに船は暫し荷泊して再び錨
を卷いた。志摩半島の一角が黒ずんで見え出し
た。

やがて船は鳥羽の港に入る頃、船では晝飯の用意
が出来て白い服のボーイが甲板の日よけの蔭に雑
談したり移り行く海の景色に眺め入つてゐる人々
に食事を知らせてゐる。やがてドヤ／＼と人々は

暗い下層船室へ渡れ込むやうに下りて行く。四五
人の給仕等が大きな飯櫃や汽船會社の印の入つた
白い茶碗などを運んでは配つた、船では食事が始
まつた、わかめの入つた辛い味噌汁の一碗に漬物
と煮しめが付いてい

る。人々はこのまづい

食物を罵りながら食事

も終つて再び甲板へ上

つていく、船旅の徒然

に漿基などをさして居

る人も居る、狭い甲板

の上では賑やかに人々

が話し合つてゐるのも

ある。紀州の尾鷲とい

ふ所へ歸る名古屋邊の

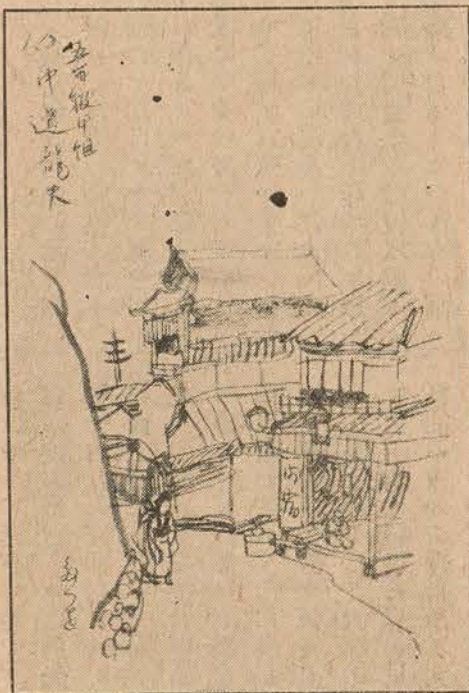
紡績へでも行つていた

らしい若い女工の四人連れが頻りに國元の人々の

噂を交してゐる、尾鷲といふところはまだこゝか

ら三十里も離れてゐる此の船が明日の夕暮でない

と着かないといふやうな事も云つてゐた。種々放



埒な話しに無邪氣な笑ひ聲が洩れて来る。私は夏
蜜柑をむきながら其處に寝ころんで周囲の景色を
眺めて旅愁を慰めた。船はやがて鳥羽の港の入口
にかゝつた、赤くはげた岩の上に根上り松が海を

のぞくやうに生へてゐる島や、白い海鳥の群
がる岩礁などが點々ど
して海面に浮んでゐ
る、狭い港の瀬戸は近
づいて来た。汽船問屋
の白い旗が長い竿の先
に潮風になぶられ乍ら
翻つてゐる。強い汽笛
が俄かに思ひ出した様
に二度ほど續けて鳴つ
た、船は港へ入つたの

だ、解舟は近づいて来る、
する。今まで甲板の上に寝ころんでゐた人々は皆
立つて欄干に倚りかゝりながら船つき町の海岸に
沿ふた家並を眺めてゐる、解舟を待つ人々もある、

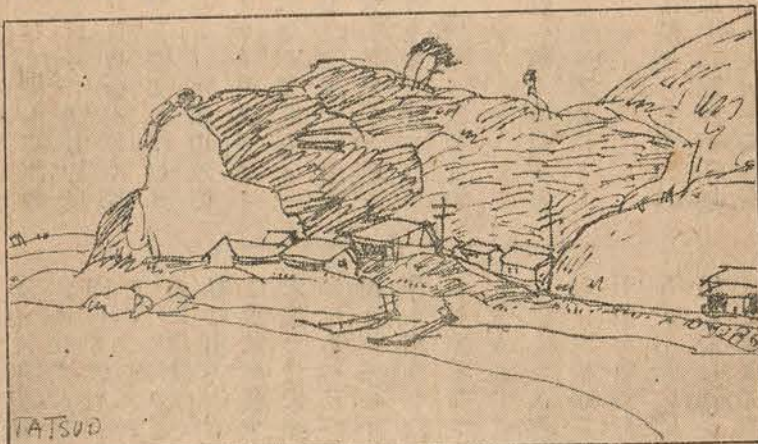
新らしく運び込まれた船客は下りて行く人を入れかわるので甲板は一しきり込んだ舢舨は荷物を積み下ろして舢舨を離れていった。舢舨の中には眞夏の強烈な光線を浴びて輝いてゐる橙色のパラソルが浮いてゐた。

船舶の間を縫ふやうにして船は愈々鳥羽の港を離れた。大洋の蒼海は前に展けて汽船の動搖は漸やく加はつて行く、管島の燈台を左にノトノ鼻を右にして船は針路を眞すぐに南にとつた、此の邊は有名なあわびの産地で海獣のやうな海女の姿が島の岩かげに見えかくれる、遙かに遠い――三河の山が雲煙模糊として空と水との境界に浮んでゐる、伊勢の山々が追々遠ざかつて行くにつれ志摩紀伊の山脈が蜿蜒として續いて見える、波は輕々として舢舨を叩き大洋の怒濤になぶられつゝ木の葉のやうに漂ふて行くのだ、澤山の漁舟が群をなしてこゝかしこに舢舨を釣てゐる、海女の小舟を操りつゝ汽船の行手を横切るものもある、明るい南國の色彩に満ちたベバミントのやうな海の色は岸の壁巖に吠え上り遠い波の響と白鳥の啼き聲が悲し

い調子に聞えて来る。船は的矢の灣口に近づいて来たどかなたに遠く海面に突出した岬頭に眞白な燈台が見えた、船が近づくにつれて燈台守の家、そこに見える小さな窓、數本の磯なれ松が其の家を蔽ふやうに延びてゐる。この斷崖の一角に屹立した白塗の燈台こそは的矢灣口、安乗の白色廻轉二等燈台なのだ。白日にいられるやうにこの青い海に面してゐる燈台、闇となれば幾多の航海者唯一のたのみとする燈台の光のいかに神秘の光に秘める事よ、私は思はず燈台守の色々なローマンスを頭に書いてあゝした淋しい燈台守か生涯を消してゆく彼等の生活を想像して見た。やがて船は的矢の半島をめぐつて大王の鼻に舢舨を向けた、いよいよ大王崎の絶端の森が見えるやうになる頃には伊良胡の方から押寄せる大うねりに船の動搖は急激に加はつてゆく。白い波頭が異様な響を傳へて舢舨を叩くのである。飛魚の一群が舢舨にすれ／＼逃れるやうに飛んでいく。かくて其日の夕暮近い頃船は大王岩の手前に入り込んだ岬のかげへかくれるやうに入つて行つた。見ると、陸は一面の山、

斷崖の削られた其の一角に所々石垣でかこつた家

が見える、そして崖を下りた谷あいのような窪地が村の主眼となつてゐてやゝ人家が稠密である、渚には舢舨先に青鬼や赤鬼の極彩色の面が刻んである大型の舢舨や小舟が濱中狭いまでに引き揚げてある今沖から着いたばかりといふやうな漁船もあつて半裸体の海女や赤い犢鼻褌をした漁夫達が忙がしうに行き來している、女は白木綿の腰巻に白い襦袢をはきて素足のまゝ、頭へ魚籠のやうなものや鯛桶等をのせて石段の山を登つていく、そうした風物と周囲の景色が餘り異様であるのに私は驚異の瞳をみはらずには居られなかつた。海は餘りに深くて到底船の錨は底まで届かない、やがて舢舨を俟つて私は



屋といふ兼料理屋といった風の可成り汚れた家だ

手摺に靠れてジツトこの大王の村の景色に見とれてみた、こゝでは四人ほどの客が下りた、而して乗る人は一人もなかつた。舢舨は右舷の荷物を積下しする窓に繩をく／＼つて波の下つて舢舨と窓とが平均を保ち得るとき飛び込むやうに舢舨に移るので一方ならぬ危険を感じた。私達の乗つた舢舨はやがて本船を離れて二丁ほど隔つた海邊へ着くまで大凡二十分ほどもかゝらねばならなかつた、伊勢の四日市の埠頭から一日の船旅に可成り疲れた体を漸やく陸に運ばれて私は其處の魚問屋で宿屋の位置を尋ねてから狭い漁師町の軒を探して歩いた。

波切といふ町ではいゝ旅館といふものもないと、二度目に聞いた巡查から教はつて着いたのは志摩

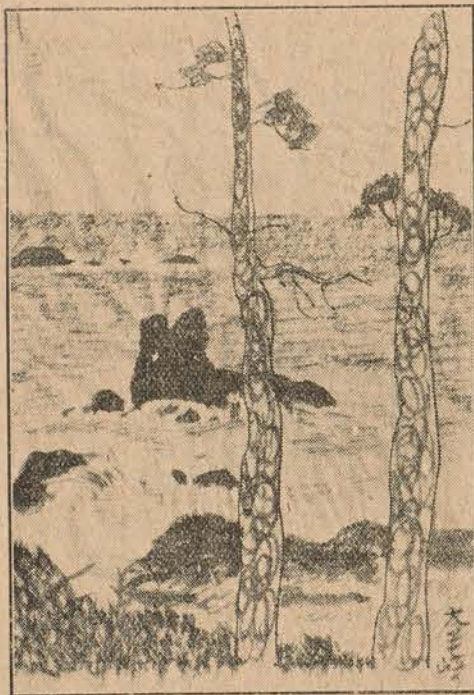
つた、二階の裏座敷の八畳に私は旅の荷物を解いた、そして疲れはてた軀をだらしく横へて窓外に迫っている断崖の岩角に腫を投げた。落日の反映に眞赤に彩られた岩根に咲いた鬼百合がどんなに此宿に着いた其夕暮に強い印象を刻まれたか知れなかつた。部屋は何の装飾もない、水墨山水の怪しげな掛軸が床の間に、つてゐる外ふすまの汚れたのと畳の椽の茶色であつたのが氣になる、やがて夕餉の膳を運んで來た。おこまといふ廿歳位の丸顔の女で京都の生れだと云つていた、色々土地の事を聞いて見たがまだこゝへ來て間がないとかで何も知りません、と云つて何事も語らなかつた。

私はやがて夕餉も済ませて都の友へ送る通信を書いたり旅のスケッチの數々を出しては眺めたりした。

灯ともし頃には大王の森の頂から陰曆 日頃の月が朱色をして上つた、私は開け放した窓際の敷居に腰を下して此宿の二階から望まれる大王崎の握り瘤のやうな森を望んで月を眺めた、狭い／＼街

いる。吞吐する怒濤の泡聲、白沫の飛散する異常な海の響に私は暫し我を忘れて茫然として其處に佇立んだ。

翌朝私は未明に起き出で、此大王の絶端から海洋の日の出を見様うとして此處に來た、草には露にうるんだ花が紫色をして星の様に連つてゐる、太陽のまだ昇らない雲の色は灰白の灰色をしてゐる、聽て其灰色は刻々と變化して五彩の綾を織りまぜた不思議に美妙な色彩を現はしてゆく。濃紫色が段々淡紅色に變つていつて水平線上には一條の黄金色に輝く帯の様な雲が見え出した、海は群青の濃い油の様な色彩をたへて緑金色の波が異様に輝いては動いてゐる。寔府から明るみに出たやうに光と色彩は漸々と鮮



麗を加へて次第／＼に萬象は眠りから醒めた。絢爛な黄金色の光輝が幾條も雲間に洩れて朱の魂のやうな太陽が水平線上からのぞき出した、其刹那、私はかゝる雄魂の曙光に對して云ふ事の出來ない一種の崇高なる感覺に打たれた。

私は宿へ歸つて朝餉を済ませ宿屋の主人に教はつて御座岬の方へ磯傳いに行かうとして宿を出た、私は道々スケッチなどする心算で大きな畫板や、スケッチ箱杯を肩にしてこの荒深たる漁村を貫いてゐる道ともつかぬ貝殻渉りの亘道を崖を上つたり低地が續く海邊に下りたり断屑の叢を分けて危うく辿る岩壁の小徑など或ひはきび、どうもろこしなごの植つた志摩半島特有の丘陵を横ぎつたりした。叢には蒸し暑さうな

路を白い襦袢の海女の三人、五人、手を肩に延せあつて不思議な節の俗謡を歌ひ乍らゆく、月の蒼ざめた光が屋根に光つて家の蔭が街路にクッキリ印している。狭い路を大勢の漁夫や海女がソロ／＼と通つて行く、紅提灯の下つた氷屋の屋臺の前には漁夫の娘が子供の手を引いて立つて居る。私は宿の浴衣をかりて海への方へ出かけた、今夜は暴風が襲來するかも知れないといふので無數の漁船は皆道路の真中や砂の上や漁家の軒に引き上げてあつた。濱へ出た、大王崎のかげになつた海面は眞暗にかげつて白い波頭かた／＼暗い海に揺れ乍ら岩をかこんでゐる。私は暫らく其處の砂の上に佇立んでいた。岬の一端を白銀色の月光が冴えた光を投げて波の音はこうした世界の單調と沈黙を破らうと怒號している。

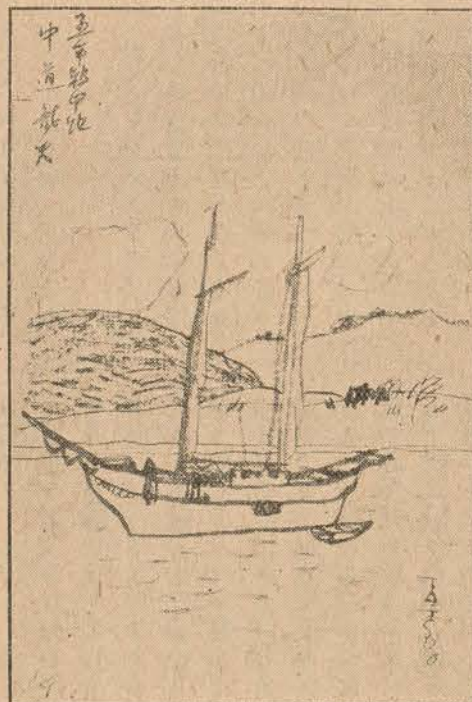
私は其夜暗い崖道をトボ／＼と辿り乍ら岬へ出る石段を登つた、月の光で明るい岬頭にうづくまりながら潮の泡沫に濕つばい衣をふるわせて神秘の境に心は彷徨とした。月の明るい夜目にも其處には海軍の望樓臺が築かれてあるのを知つた。大きな松が絶壁の一角から海に落ちるやうに生へて

夏の虫が悲しいコーラスを旅人に傳へ岩根に咲いた鬼百合の眞赤なや薊の花のどげ／＼しい色彩に夏のいら／＼した光が降り注いでいゝ強い草いされの中を白日に乾されて私はトボトボ歩いた。頑丈な赤銅色をした漁夫が只一人黙然として岩陰に網を繕つてゐるのがあつた、紺青の海を背景にして赭色の岩の光と蔭のクッキリ印された岩のものと網を繕ふ漁夫は其のまゝ畫になるのであつた、はるかに／＼遠い／＼紀伊の半島が海洋の一方に突出してゐると、二三の島の蔭から鰯網の漁船が蜘蛛の子を散したやうに現はれたりする、此邊の海岸一帯に海女の作業の最も盛んな所で、やがて私は濱島の小さい、それは荒廢した漁村に入つた。軒傾いた荒れはてた漁家の軒端には蛸やあわびが竹竿の先に突刺して干してある、網を繕ふ漁夫がいる、このみなとの灣口に突出した岬には魚見小屋等があつて、赤と白との旗が竹竿の先に／＼つてゐるのが見える。

私はこゝで數枚のスケッチを得てそれから又半島の崖道傳ひに波切の村へ歸つて來た。宿へ歸つて

私は海女の畫をかく可き草稿を作りながら宿の娘に色々此土地の風俗、習慣とか或ひは俗謡の幾つかを聞いた。波切といふ村では人口が七百許りの中女が四百人はあつて遙かに男よりも多いといふ事であつた、そして彼等の生活は全部漁業を以て糧を求め男は小船で沖へ漁獲に出れば女は海女として海底の作業、あわびや海草の採取をするのである、そして女として此土地に於ては亭主の二人前分は働き得なければ女房としての資格のない者とされている。それからいふものは私は土地の總ての者を見るにつけても餘ほど興味が生じて來た。私は其日の夕暮宿では風呂が損じて燃けないからお湯屋へ行つてくれといふ事であつたので、私は始めてこゝとした漁師町の錢湯へ入つた、番臺に座つてゐる色の黒いすき髪にして後ろで束ねた頭をした十五六の小女が四五人の小女と話をし合つてゐる。彼等は皆海女なのだ、其中には宿屋の向ひ側のおすしやの娘も居た、隣りの大工の家の子も居た、而して私が毎日宿の裏二階から下をのぞくといつても面を背けて逃げ込んで了ふ子も居

た。私は彼等の群の面白い物語を戲曲的に想像したりした、湯から歸つて畫かうとしてゐる海女の畫の事に就て色々な智識を獵らうとして宿の主人等から様々な挿話を聞いた。夜になると月の光が明るく海邊のかゝり火等珍らしく見えたので私はいつも濱へ出ては若い漁夫群の涼み乍らの放埒な話しの斷片に耳を傾けるのであつた。



丁度村では陰曆八月十五日の盂蘭盆を迎へて盆踊りと大念佛が催される事になつた、こうした荒寥たる漁村に夏の夜の觀樂の限りをつくして放縱な興樂をひさばり盡さうとする若い漁夫にはこの盆踊りはごまかれるものはなかつたのである、十五日の夜は、月の明るい晩であつた、其夜、かの大玉崎の岬角の僅

かに砂地の連つた海岸を選んで其處で大念佛といふのが行はれた。大念佛といふのは一種の施餓鬼と同じやうなもので、先づ其夜此濱邊へ村では一年間に死人のあつた家の家族達が盛裝して、一本のばん傘をさして來るのである、そして其の傘の無數の骨へ死んで行つた人が殘して置いたもの、假令へば男なれば帽子、煙草入や、女なればくし、紙入れ、帶などといった風のもので日常離さなかつた様々なものを傘の骨に吊り下げるのである、そして更に紅提灯を下げ傘の端へ友染模様の華手な布を卷くのである。こうして彼等の一群は圓形を畫いて波の打ち寄せる渚の邊に鐘、鼓、拍子木の入つた念佛に念佛を合唱しつゝゆるやかに歩くのである。私はこ

の氣味悪い行列を見て異様な感に打たれた、ついで想像した事もなければ聞いた事もない、外國の何處の未開地にでも行はれさうな此の行事を不思議と驚異を以て眺めた、實に原始的なものである。月の蔭になつた大王崎の巨象のやうな斷崖のもとを大洋の怒濤は白い波頭をふり立て吠へ上つてゐる。

單調な濤聲がこの念佛の——デーンッデーンッ、ヒツカラカン……カン／＼——異様なメロディに伴奏して暗い沖からは死んで行つた亡者が返らぬ命を返せ／＼と喚ぶかのやうに聞へた。八十人許りの行列がお念佛を亡者にたまはつたと云つては二人去つて行き其夜も更けて行く眞夜中頃には十人許りしか残つて居なかつた私は岩の上の叢の中に夥だしく並んでゐる墓の石に腰かけてデーンッそれを眺めてゐた。やがて月は岬の一端に傾いて暗の色は次第に海面をおふふのである、私は夜明け近く頃夜露にビツシヨリぬれて宿へ歸つた。而して其翌日十六日の晩からは岬頭の一角で賑やかな盆踊りがはじまつた。彼等は終夜踊り明かす

のである、彼等はこうした時の幸福と觀樂をどんなに楽しんで居るか知れないのだらう、海女の白い襦袢が縫れるやうに其中に動いて見える、紅提灯が串柿のやうに音頭をとる小屋台に吊られてある音頭をとる涼しい聲につけて手拍子足拍子が妙みに整つてだんだん聲や透明な聲が和し調子を保つて段々高調に達して行く。かくて彼等は其夜も踊り明かして了ふのである。

こうして盆の十五日から廿日まで是一般漁夫の仕事も休んで、たゞ彼等はこの酒と女と音樂に酔はんとするのである。狹角の淋しい漁村にこうした觀樂の日を眺めて旅人は數日を経た、而して私は今まで想像にもなかつたこの不思議な海女の國の幾多の挿話を收めて八月の廿一日に其處を出立した。歸途私は汽船の便によらずして陸路を十里。志摩の鳥羽へ來た。志摩半島磯松や、荒寥たる丘陵に、きび畑やどうもろこしの畑のこゝかしこ續く小徑を喘ぎ乍ら辿り辿つた、其日の晝頃には的矢灣内奥深く入り込んだ磯部といふそれは頽廢した宿場に着いた、其處で私は晝食を終へて橋のたも

とからガタ馬車に揺られて黄昏近い頃鳥羽のみなとの汽船宿へ着いた。

かくて私は再び旅装を整へて伊良湖の旅に立つたのは其月の下旬、早や海水浴の客も漸々尠なくなつて海邊の町は追々と淋しさを加へて行つた。而して私は九月の末、一夏の旅に疲れはて、夏瘦せした軀を都に運び歸つたのであつた。水屋の旗ははづされカフエーのバルユニーは閉されサイドボールのアイスピーヤ等はとり外されて表には金字のドアが固く緑色のカーテンにおゝはれてゐる。加茂の河原には河原蓬の丈高く延びたのに秋の實が結ばれてあつた。都にはモ―立つ秋の風がたもとを拂ふ頃である。(終り)

休暇中の二行

第五學年甲組

竹中喜久三

伊吹登山の記

七月二十七日余は我好友野田氏と共に縣下の名峯伊吹に登山を試む午後二時發足す鳥居本に於て西谷竹田の諸氏と合すべき約あり依りて切通し坂よ

り道す鳥居本に到るに前記諸氏先發したりと見えて相逢ふを得ず依つて街道を米原へ急ぐ。

我等身には古びたる麥藁帽を被り數日前脱ぎすてし制服の未だ洗はざるまゝにカーキ色になれる夏服を一着し脚には黒脚絆黒足袋に草鞋を着け足の運も軽くステッキ片手に辨當腰に金鐵も熔くる三伏の酷暑も何かは恐るべき一雙の健脚を以て山野を跋涉せんとす其意氣や壯なりといふべし。

辛じて三時過ぎ米原發の列車に乗り込むを得たり我等と同じ服裝の學生三名此列車に乗りしと驛夫より聞きさてはとばかり大ひに喜べり聽て長岡驛に着するや始めて相會するを得て遅刻を謝し共に此行を祝す。

停車場を出るや伊吹山は遙か前方に巍然として我一行の登山を待つが如し動かざる事山の如しとは誠にかくの如きをいふならん悠然としてせまらず何物にも犯されざるを示すが如く高く蒼穹に聳ゆる様見る人をして心骨共に高潔ならしむ頂上の眺望固より可ならんも麓より仰ぎ見る雄姿は又格別なり。

兎角する内黄昏近く麓の登山口なる上野村に入り
 とある百姓屋に着けり百姓とすれば百姓にもあ
 らずさればとて旅館には固よりあらず四年目交替に
 登山客の宿をなすなりとは世話なれたる此家の女
 將の言なり足を洗げば堂上既に三人の客あり幸甚
 し其は我同級生ならずや彼三人は山本大谷朝比奈
 の三氏なり一行の意氣益々揚々たりサイダーを抜
 き桶風呂に入り持參の辨當を食ひ雪隠に行き基石
 を列べ談笑口論喧嘩角力と次第に夜は更けて遂に
 夜半十二時となれば再び草鞋を穿き金剛杖を求め
 剛力の案内にて徐々に登り始めぬ始めは阪路崎嶇
 として林中を行くなり漸く登り來れば山益々急に
 路彌々細將に極まらんとして僅に續けり登る程に
 木は遠く下に離れ來て夜目にも薄暗く續くは一面
 茫々たる草原なり只見ゆるは限りなき螢の光り露
 滋き草陰に且つ消え且つ光り鞋下皆光りあり螢火
 に連なりて更に遠く尙點々なるあり隙洩る遠近の
 闇の燈にやあらん仰ぎ見れば更に又點々たるは何
 ぞや見渡す蒼穹星斗燦爛天上天下は唯美はしき燈
 火に依りて飾られたり。

一行は意氣衝天知れる限りの軍歌を歌ひ盡し残る
 英氣を聲に任せて萬歳を叫べば山鳴り谷應じ麓の
 林に反響して聲殷々たりかくて四合目に着く他に
 は皆標石の立てるのみなれど此處のみは些々やか
 なる藪子小屋を建て番人ありて湯もわき少しは菓
 子も賣れり菓子には價高き故に求めず湯を酌みて宿
 の女將の拵へ呉れたる握飯を食ひぬ食を終る頃峯
 の彼方天の一方僅に明し妖しと見れば更に明かな
 らずやそは月の出るなりけり待つ程に銀光益々さ
 し來り驚破忽然として銀鐮の穂先は表れたり表れ
 しより暫時も止まらず明皎々たる白銀の大鐮は悠
 々と峯を離れつ峯を離るゝ其時遅く仰ぎ見る幾十
 の面に淡き銀光サツと迸れり。

稍あつて此小屋をも後にしつ山益々急なれば左右
 に屈曲して登ること幾回金剛杖を力に一寸登りて
 は一尺上り或は巖角を攀ち或は藤葛に縁り透逕匍
 匍手歩み足行く今や天空漸く低く星斗亦近きを覺
 えたり。

我一行の案内は深切なる四十歳計の男にて聞けば
 在郷軍人といふ事なり七合八合の標石ある毎に一

々提灯の火に其所在を示せり岩あり穴ある毎に又
 一々此所は危険なり其所は氣を付けとなど教はる
 中九合の聲を聞けば流石に來し方に見下ろされて
 指さるゝ四合目の小屋の燈は遙か下に小さく見え
 たり山は既に平坦にして幾何もなく峯に達せり峯
 には達したれど日昇る迄は尙間あり何の妨ぐる物
 もなければ肆に吹き荒む風を一の古き石塚の陰に
 避けて休めり登る間は汗も流れたれどかくてあれ
 ば寒きこと甚し寒ければ用意のシャツなど着たり
 されど着されば得堪へざる程の寒さにもあらず登
 山者は一行の他に尙幾十人あり元氣よき若者の鼻
 歌等も聞えたり。

待つこと凡そ半時東天僅かに微白きを覺えたり尙
 薄陰き曉風に曝され乍ら立ちて東を望む程に薄白
 き空は黄ばみ行き稍赤味をさへ混じ來れり地平線
 に沿ひて低く棚引く横雲に反映して或は黄に赤に
 或は紫に緑に彩れり見上ぐれば銀色に輝きし月も
 星も今は既に光を收め見下ろせば美濃飛驒信濃の
 諸山は尙黒く打ち續き折り重なりて東を望み大な
 る日の出現を今や遅しと待つが如し。

案内者は一行の前に立ちて御嶽乗鞍嶽等を指し示
 せど何れが何れなるや朧月夜に杉の木立を示さる
 ゝに異らずと見れば黄なる穴は益々赤く赤き空に
 は彌々金光差し來り今こそ日出づと思ふも暫し眞
 紅の一點は世界の端に浮み出でぬ驚破日出でたり
 と見るより早く金點は金線となり金線は金蹄とな
 り分け行く横雲の間を縫ふて大なる太陽は爛々と
 躍り出でたり躍り出づる其時遅く夜の幕は全く取
 り拂はれ山腹に纏はりし白霧は吹き渡る朝風に蒙
 らざり立ち去り跡には見る限り撫子女郎花桔梗伊吹
 艾其余は名も知らず紅紫黄白點々として美を競ひ
 研を争ひ満山皆花なり山頂は四五町の間略平坦に
 して日本武尊の石像と地藏とを安置せり一度此石
 像と押し併んで四邊の眺望を縦にせば東は是れ廣
 茫千里の濃美平野遠く雲際には没する邊は伊勢海な
 らん西は是れ近江盆地中央には細波漫々たる琵琶
 湖を湛へ湖上には多景島竹生島浮ぶが如く岸の彦
 根長濱等箱庭の如し北は美濃飛驒南は伊賀伊勢共
 に峰巒盤礴して蒼翠天に際す地高く眼は豁く眺望
 の佳なる凡筆の盡す所にあらず願望徘徊歸るを忘

れたれど時遷るに驚き遂に意を決して地獄谷より下山す。

地獄谷とは其名の如く絶壁千疊の深谷なり。此の如く此所を下り来れば其處に巖屋あり深さ數丈外光殆ど到らず黑暗冥々の裡に異様の響あり何ぞと驚けば蝙蝠の翻々たるなり此處は昔伊吹三郎が隠家とぞ聞えしこれより右折して進むこと數町にして稍平坦なる處に出づ廣き野を斜にしたるが如き處なり此處を下れば即ち四合目の小屋なり此の邊より下には灌木生ひ茂り更に下る事數なれば杉林に入る午前八時再び麓の宿に歸る金剛杖は五分許を減らし草鞋を更ふること三度に及べり。

養老瀧を觀る記

我等此の儘家路に着くは遺憾なり今一度何處に向はんと遂に程遠からぬ養老瀧を選びぬ。

朝食を了れば既に九時なり長岡發の上列車に九時四十一分なるあり何卒してそれに乗り込まんと急ぎ宿を飛び出し金剛杖は邪魔にはなれど棄つるに忍びず小脇に搔込み長岡停車場目掛けて一目參に

馳け出せり餘りに急ぎし故先頭の某路を謬り馳け行くに隨ひ次第に細くなり遂極まりて行く能はず時連日降雨なく野川の水涸れて底の露れたるあり是れ屈強と其處に飛下り砂上を走る事數町左岸に上り再び正直に出るを得たり。

かくて發車前二分辛じて停車場に達するを得肌の汗拭ひあへず急ぎ汽車に乗り込めり我等皆外には塵埃寸積し内には熱汗流るゝ如く臭氣芬々として鼻を撲つ近寄る乗客は覺えず身を窄めたり我等これ幸と泰然臂を据え帽子を團扇に涼を納れ極めて悠々閑々たり。

三十分許にして大垣に着く下車して瀧に向ふ郊外に出づる頃瀧を人に問ふ其人山の一角を指して曰く「見よ彼の山の一角に赤き土の形恰も櫻樹の如きあり瀧は其向側なり」と時しも夏の日盛りなれば流汗瀧の如く口中頻りに渴を訴ふれど求むるに一掬の泉なし行く事暫時にして道側に氷屋あり頗る小規模なるは買ひたる儘の紙袋より砂糖を取り出すによりて明かなり委細構はず飛び込み各々數杯を傾く氷屋大ひに面食ひ頻りに急ぎけれども手

個のみなりき。

團扇を使ふ暇に

第五學年甲組 山田 善 衛

——夏期獨り言——

▲春夏秋冬取々の趣あり。春花、秋葉、冬雪共に趣あり。皆之を樂しむ。知らず夏に何の趣きのあるを。夏は苦し、皆之を好まず。されど己れ必ずしも夏を好まざるにあらず。暑さの甚しきを厭ふ也。蠅の多きを厭ふ也。蚊の多きを厭ふ也。汗の流るゝを厭ふ也。夏に暑さなく、蠅なく、蚊なく汗のなかりせば、己れ何ぞ夏を厭はんや。

▲聞く、文士、詩人は良く夏を解すぞ。されど彼等は好んで夏を山に逃れ海にかくる。暑さを厭ふを以つて也。よもや、山の端、水の際に夏の趣はあらざるべし。山に海に又は温泉に居る、暑さの耐へ難きを知らず。是れ夏にあらざるに近ければ也。夏の語るべからざる固より也。

▲日中戶外に有りて炎天と戦ひ、風通しなき居室に執務し、或は夜蚊軍團繞裡に居る己れをして謂

付きが何となく新米らしく容易に抄取らず諸氏待ち兼ねて促す事頻なり又大ひに其砂糖の少きを責むれば氷屋遂に憤ること烈火の如く果ては賣らぬ買はぬの喧嘩となり馬鹿爺の聲諸共引き上げたり施て瀧に著きしは正午頃なるべし。

瀧は山腹に掛り飛瀑巖を劈いて直下すること十幾薄恰も仙姫の素絹を濯ぐに似たり響は轟々として百雷の如く飛沫は宛然吹雪の如し落ち来る水の中に白衣の男あり眼を閉ぢ手を組み口に何をか唸じつゝ佇立す我も亦浴衣を借りて其側に立てば音は益々聲々と物凄く頭肩に落つる水は千撃萬打の鎚の如し靈氣凜然として久しく止まる能はず勇を鼓し意を丹田に籠め更に止ること暫時にして出れば盛夏の烈暑を一掃し涼氣五体に滿ち滿ちて俗腸を洗ひ去り心神共に高潔となりし感あり再び浴し三度打たれ名残を惜みつゝ遂に歸途に即く三里の路を垂井に出で下り列車にて彦根驛に着けば驛内電燈燦爛たり當日余輩は宿にて朝食を喫したるのみなれども到る處に水を飲むこと更に幾度なるを知らず歸りて財布を叩けば囊中餘す所僅に半錢一

はしめなば是れ正しく夏を知る者に適れり。もし夫れ彼の外交員や、事務員や夜業家や眞に夏の趣を解すと謂ふべし。而も何すれど彼等たる者不平小言不満不足愚痴の多きや。己れ是を憾む。

▲夏を解すべからずして解せむとし、解すべくして解せざらむとす。自然の背理、理の不理、合理の不合!!これ凡輩の故を以てなるか。然らば遂に夏の趣を解し得るもの夫れ君に唯一人か。凡輩與らずと云ふ者は凡輩に終ぬる所以。

▲『何の其の』と云ふ前句に大高子葉は『巖をも通す桑の弓』と付けたりけむ。失敗しても何のその病に罹りても何のその、厄難に遭つても何の其の斃れても何のその、あゝ世は何の其のなる哉。これにてをし通せば天下何事か成らざらむや。

▲世にさても我利々々亡者の集合なるよ。一に金二に金、日が明けても夜に入つても、寝ても覺めても曰く金、金の爲になら高い頭も何の其の唯べコノと下げる哉。

▲紅葉の煙霞療養の一節に『實に立派なのは信濃川であつた。川口の衝と海に入る處漲る水の滌々

として天に横る勢は有繋に飛信越三國の郡流を網絡する者なる哉と合點さるゝ。扱て長いのは之に架る萬代橋巾四間の長四百三十間橋の上を行くばかりが七町有半とありて之を車で輾がす希代な乗心は何に況へんやうも無い。

▲『聞く所に據れば明治十九年の架設にして經費貳萬四千七百拾四圓〇九錢貳厘、私費であるから車は一人前參錢五厘と云ふ橋錢を取らるる。鐵道馬車の一區より高いのであるから其の橋の長い事を知るべし』。

▲今はどうなりしか、見たるにもあらず、聞きたるにもあらずただ紅葉氏の文を讀みたるだけなれば如何とも知るに由なしと雖ども、當時山人の遊ばれし頃は、參錢五厘といふ高價な橋代を取りたるものの如し。公衆の爲に架設して其の便宜を計るは善事なるべきも、渡り代を取ると云ふに至りては、其の動機或は善心より出たるものに非らざるか。營利的の橋など、己れ未だ、前にも後にも聞き覺えず。

▲『然しながら抑も新潟市とも謂はる者が木戸錢

を取つて喜んで居るのは不見識も太甚しい、縣下は多額納税大盡の顔揃で居るのではないか。貳萬五千圓ばかりの仿金は誰か一人の手でもどうかなりやうなものを僕をして某の富あらしめば參萬圓ばかりハンカチーフに裹んで橋の欄干に結び付けて萬代橋鐵道改築寄進といふ紙札を下げて、くゝるのであつた。折角偉大な信濃川もこの參錢五厘のために夥しく器量を下げたのであつた云々』。

潮り得て妙なる哉。信濃川もこの人を得この言を得て、少なからず怒りを静めしならむ。拜金黨の多き世は何をする事やら、常識にては判斷推量の出來ぬ事のみ多し。歎す可き哉。

▲現代評論壇上を見みるに寥々寂々の感なくんば非ず。其の良く重きを成せる者、僅に蘇峰、雪嶺、桂月の二三氏に過ぎず。其の他、黒頭巾と云ひ、鷺城と云ひ、華山と云ひ、半山と云ひ、摩天樓と云ひ、龜城と云ひ、愛山と云ひ、彼と云ひ、これと云ふ、皆翻々たるのみ。

▲近來黒頭巾、鷺城の二氏荐りに人物評論を物すと雖ども、淺薄にして、含蓄を缺き、多々見るに

足らず。前者は、矢張趣味煙草記等書く方がよろしからんか、されど其の最善を曰はしめば、文學士横山健堂として水戸長州の維新史に書くに如かず。もし其れ鷺城氏に至りては、人物評論の何たるを解せず、惡戯に、不見識と惡文章とを以つて、天下の人物を罵倒す、危い哉。近々中野耕堂氏等銳利なる觀察と、輕妙なる文筆を持して論壇に立つと雖ども未だ斯界の重鎮たる能はざる事遠し。

▲蘇峰の國民新聞に於ける、雪嶺の日本及日本人に於ける、桂月の學生に於ける、等しく斯界の重鎮たり。而して其の云ふ所を見るに各其の流を異にす。

▲蘇峰は昔の意氣既に無く、ひたすら、權門に阿諛し、藩閥に與し、其の論する所、圓轉滑脱少しく鋒芒を露して大いに圭角を裹み、一寸爪を出しては、忽ち猫撫聲を遣る。喝破するが如く實は喝破せず、満を持して放たざるの間に畢る。料らざりき當年一介の民友子敕選の椅子をかち得んとは。

雪嶺は清節三十餘年、單騎屹立、物質欲外に立ち

て、人格を砥礪し、短刀直入の筆を持つて少壯人士を訓ふ。彼に權門何かあらむ。藩閥何かあらむ。桂月は十年一日の如く、淳々たる態度と、高遠なる見識と、清雅老熟の文を以つて、全ら青年學生を導く。霸氣なく、野心なく、名利なく頗る平々坦々、其の信する所を云ひ、其の信する處を行ふ一度口を出せば靡然として、まねく所に集る偉な哉。

▲蘇峰の大なるは其の才を以て也。雪嶺、桂月の大なるは、其の人格を以て也。蘇峰の云ふ所は、自己及自派の爲にして且つ餘りに名利に急なるを以て往々矛盾を免れず。國民新聞の「東京ダヨリ」と「日曜講壇」の矛盾多きは是が爲なり。才人や實に才筆多し。

雪嶺の云ふ所は自己のために非ず、自派のために有らず、各利のためにあらず。現代活動しつゝある人士の爲なり。

桂月は往年の霸氣を捨て、平々淡淡の事と云へども、箇中に深味あり、言外一種の温情人に迫るを覺ゆ。

推移と互に相容るゝものと云ふべし。これ先生の恒に卓越せる所以なり。

「學生」の卷頭評論の如きは道に先生留心の餘に出でたる者、一つとして大作ならざるはなく、其の論する所一點輕浮の念思無く、嘲弄なく、漫言なし。鋒芒悉く眞率にして悉く透徹、これ其の評論の大なる所以なり。

嘗て某富豪の評傳を書きしや、其の報酬の意外に大なるを見て棚から牡丹餅と戯語せしを見て是れ或は代作にあらざるかと懸念せしが如き、或は文學博士云々のありしや、先生に野心あり、霸氣ありと云ひしが如き、皆先生を知らざるの餘に出でたるもののみ。其の博士たると、たらざると先生に於て何事かあらむ。

▲思ふに文品は其の人の品性なり、己れ蘇峰となりて、官僚萬能を説き以つて貴族院議員たらむよりは寧ろ雪嶺、桂月となりて、物質外に超然たらむと欲す。

▲フランクリン曰く「融合の最上方法は談話に在り」と。胸襟を披き眞情を發露して語るは最良の

▲蘇峰の才は雪、桂の人格に及ばず。されど其の文章を以つてすれば、皆等しく當代罕に見る偉觀也。

近時新聞記者界の文章、雜駁野粗益々其の度を加ふる間に獨り蘇峰氏の輕妙典雅流麗の筆を見る誠には至寶なり。故人春汀氏の文章を評して「概ね刺激性を帶び辛味と鹹味に富めども滋味と香味に乏しく、動もすれば讀者の反感を挑發するもの有り」と云ひたれど其の文恰も金鞍白馬の貴公子の春風裡に銀鞭を揚げて長安の大道を馳するの趣ある到底爭ふべからざる也。

雪嶺の文章近來漸く平易妥當となれり「日本人」の論説を見るに悠揚の裡、諷刺あり、皮肉あり、熱度あり、痛罵あり。其れもし堂々たる政道文學の論に至りては、用語精選法度森嚴而も其の間、警句注湧して人を刺し人を刺る。文章界の雄たるを失はず。

桂月氏の文に至りては、漸く其の絢爛の域を脱して、今やまさに其の老蒼雄勁の境に達しつゝあるものゝ如し。先生の如きは、思想と年齢と時代の

親睦策也。筆と舌とは是が機械也。心之が源泉也心澄ますしては舌安んぞ濁らざるを得む。筆安んぞ澁らざるを得む。

▲然るに今や舌と筆とは一のアトとなり了んぬ根元に培はずして稊らむ事を希ふも固より不可也而もアト漸く妙境に進んで、糊塗殆んど眞と別ち難し。舉世滔々として、蘇張の譎詐、祝駝の佞を學ぶ。長者曾て之を咎めず、後輩かつて之を咎む。

▲茶菓子等の饗應の席にて、最初に手は入れがたし、最後の一つは取り難し、これこれをなす者、其れ英雄か、豪傑か。

▲明治文壇の巨人樗牛の名皆良く之を知る。紅顏瀟灑、風采堂々、其の文は華麗壯快清雋高雅まさに人を魅す。

明治卅五年の暮、惜哉才人薄倖の恨を残してこの世を去れり。龍華寺の境内彼が墓碑の銘に曰く。「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と。何ぞ其の語の甚だ簡潔にして其の意の極めて深長なるや。思へば渠れは超越といふ勇敢なる血碑下に

あくまで向上進取せよと永へにささやいて居る様也。

▲今日青年の士誰か橋牛の名を聞かざらむや誰か此語を知らざらむや。其の名を聞き、其語を知り而して其の著す所橋牛全集五巻を繙かざらむや。繙かすとも、其の書の著名なるを聞かむ。然れども己れ恨むらくは、其の名を知り、其の語を聞き其の著を読む者、必ずしも其れ多からざるを。

▲試みに先生が銘を以てて朋輩數子に付きて問ふ其の答へ得る者僅々數ふるに足らず而も其の答へ得ざる者所謂現代秀才の諸子に多きは寧ろ意外の事なり。

▲選抜試験を受くる場合、直接自由競争裡に立つ場合、或は自己の能力を發揮し得べく、數學、法學、科學等力與りて大ならむも、國漢たどひ無用に似たりども、前者を尙び後者を蔑にすべき理由固よりなし。

▲嘗て某校入學試験の折「高山村次郎」とは如何なる人なりやとの問あり。其の一答案に曰く「昔京都三條の大橋にて蹲踞、流涕皇宮を拜せし忠臣な

これを憾む。

▲乞ふ卿等まづ人たれ。其の廟堂に立つの前、其の劍を佩ぶるの前、其の筆を持するの前、其の牙籌を手にするの前。

▲昔、アテネの哲人ダラオジニアス、白晝、カンテラ提げ大道を闊歩して「人」を求め、スコットの詩人スコット死に臨んで「人たれ」の一語を其の子弟に遺しぬ。あゝ己れ今にして思へばこの哲人の奇行、この詩人の戯語共に不朽の金言たらすんばあらざる也。

▲世の進歩に伴ひて、五月蠅き事、面倒な事も又多くなるもの哉。昔は一寸讀み書きが出来れば、鼻高高横にも縦にも立派なるもの也されど今日、其んな事では、犬ども伍する能はざる也。

▲昔彼の大學頭など云へる、畏ろしき一生の碩學鴻儒とても高が國漢蘭位のもの也。今日其んな事にては到底博士號は貰へざる也。

▲知る人は知る。木津無奄と云へば、とにかく大谷派布教師としての大立物也。雄辯宏辭をぞろに人を魅す。されど彼は正式の學問をなしたる人に

りと」。

▲何ぞ夫れ其の答案の奇抜なるや。不見識も甚しい哉。吞氣のボン槍の鴉にでも糞を掛けられ相な面の様に思はるれど、何ぞ計らむ是れ反つて天下稀代の秀才ならむとは。世はかくの如く、人はかくの如し。

あゝ今日在校博學の才子夫れ幸に自重あれ。

▲蕪村の句に

春たけて蒲公英の花吹けば飛ぶ。

評し得て妙なる哉。四月頃野山一面に咲き添ふ黄なる蒲公英の花は可憐なれど、春たけて暮となれば、白色の一塊となる。吹けば即ち飛ぶ。

▲幼にして神童と呼ばれ、少年になつて秀才と云はれ、青年にしては才人となり、壯年に入りて漸く凡人となる。誰かこの人を見て惘然の情なからむや。吹けば飛ぶ、蒲公英の花なる哉。

▲今日青年學生が希望し期待し隨喜し渴仰する所曰く「大政事家」曰く「大軍人」曰く「大文豪」曰く「大事業家」と。何ぞ其の標榜する所の者「大」の多きや。ます己れ人たらむと欲する者のなき、これ

非ず。正統の學校を出でたるにも非らず。獨學一本で、遣りし人也。されど天下有數の紳士と伍して未だ引けも取らざる也。

▲常に語りて曰く「我輩は獨學だから廣さはないが興行きは深い」と又曰く「今日の學生は廣さは廣いが興行きが無い」と。

▲然り彼は興行が深きが故に、とにかく、其の道の大をなし、現代の學生、廣さのみ廣きが故に未成品となり終る。

▲當代の才士卿等は學校に在りて、莫大なる時間努力と、金錢とを犠牲にして而して其の贏ち得る所は何ぞ。曰くウスツベラなる學問、興行のなき學問、實用に適はざる學問、徳の伴はざる學問あゝ是れ文明の供給する賜物なるか。

▲あゝ磊落、あゝ磊落、遂に磊落なる哉。

大言壯語良く吹くが故に曰く磊落、先輩を罵倒するが故に曰く磊落、ズボラにてよく缺席するが故に曰く磊落、夜更かしして朝寝するが故に曰く磊落、教室にて常に居寝りをするが故に曰く磊落、ストライキの首謀たるが故に曰く磊落、白晝大道

の真中にて焼芋の帯を齧るが故に曰く磊落、衆人中にて放屁して動せざるが故に曰く磊落、赤切符にて一二等待合室に入り悠々煙りを輪に吹くが故に曰く磊落、喧嘩をよく賣るが故に磊落、而して敗けて騒がざるが故に曰く磊落、怠慢にして大膽なるが故に磊落而して遂に失敗して世間を痛罵するが故に曰く磊落。

あゝ磊落、磊落なるが故に豪傑、豪傑なるが故に己れ姑く之に愛惜せん哉。

▲バクストン曰く

何事も精神の全力を以て研究す可しと。

愚者はこの一言を解す能はず。合點する者は漸うやく凡人也。感服する者に至りて、是れ稍々智者に近し。

▲己れ曩日、右の耳を病みて困れる事ありき今は癒して元の如くなり當時の苦痛も殆んど忘れたれど、其の時の苦痛を呼び起せば今も餘り善き心地はせず、たい耳の内が錐にでもかきまはさるゝが如き痛さにて、正しく頭を持ち上ぐる事も出来ざりき。物をなさむとすれば手に付かず懊惱の内に

精神上にも大關係をなす物也。

日清日露の兩戰後國民の頭が著しくあがりて、足元が漸く危くなりぬ。今の内足元に注意せずんば躓き倒るるの日も遠からじ。其れには腰を強うするを要す。正坐に耐えざる様にては困つたものならずや。

及ばぬ事をなすを、猿が水中の月を取ると喩ふ。元來猿は、群集をなし、其の水を得むとするや、數十頭互に手をつなぎつゝ、樹上より下りて溪水を飲む。たまたま月夜に會せば、月水に宿り恰も月を取らんとするに似たるより、かくは云いしならむ。

されど其の實猿は月を取らむとするものに非らず。昔李白が酔うて水中の月を取らむとし、誤つて溺死したりと云ふ。詩聖も酔うては猿に如かず。時今や秋期にあり。秋風到る處に吹き。明月高く半天に掛れり。一葦の行く處を縦にすれば、飄飄乎として羽化登仙する思ひあらむか。されど誤つて水中の月を取る勿れ。(了)

日を暮しぬ。若しこの耳が！など、思へば立つても居ても堪まらず、悶々の情は日を逐て増す。

▲人生五十年固より天地の長久に幾何もなし病めれど苦しむに足らず等と日頃の達觀も出ず、せめて何時の世になれば桂月氏の如く「我耳聞えずなりぬ。されど自から恨みず。聞ゆる方の耳を枕につくれば世の物音聞えずなりて思考するに却つて都合よき也」等と空とばけた言葉の出づるにや。

▲正座して以つて書に向ふとは古人が讀書の姿勢なり。今椅子等の出來たる加減にや。久しく正座するに堪えず、じきに痲痺が切れて胡座、横膝、なげ足などをなす。されど是にては眞面目の勉強は出來ざる也。

▲正座せざるが故に腰に重心なく爲に腰がさがりて、見るからヒョロ／＼したり。これでは角力等も取るべからず。

▲角力しても百戰百敗なり。到底勝つべからず。青年諸子少しく腰を強くしては如何。

▲本月(九日)の學生にも其の評論に正座につきて出で居たるが、是は唯外的にのみならず内的即ち

夏の北國から

第五學年甲組 吉田真雄

A 君に

其日其日の人生を徒らに、糊塗して居るのが、私には大なる恨事であります。私の生活を裏切りする様な現在の住居は、とても私の耐え忍ぶどころではない。

義理中とは云へ、動物園の様に、個々別々の人の集つた今の住居は、私等北國人には適しない。物質上の慰安は、二として、精神上の慰安の缺乏が何より私を苦しめます。私は、明かい、湖畔の町に、拾年以上も住ひながら、明かい湖國の氣分に接していない。やはり私は陰氣な一北國人である。

拾四才の時、中學校に入つてから、今年で足掛け五年目、即ち拾八才の今日まで、淋しい田舎に、生き甲斐なき、生活を續けて居る。そのうちに幾分の曙光を與へてくれたのは藝術でありました。決して私は偽藝術に没頭するのではない。なぜな

れば藝術は私唯一の慰安者であり、亦私の生活でありますから。

漱石の虞美人草中の、甲野さんの生活、——第一美的の生活を想ふ心は私に深い感動を與へました。そして小野さんや、藤尾の様な人達に、一種の反感をさへ、思ふ様になつた。

拾六才拾七才頃には、その思想が——憧憬が段々と擴大して、隠者の生活を欲求するほど、風俗に嫌惡を感じました。隠者の生活。——風俗の嫌惡。これは北國自然の與ふる色彩——氣分に接近した事を明白に證明しております。

私は、未明の暗い憂愁な色の作品に、共鳴します。私は、浮標の様にボカンとして、軽い微笑を喜ぶ事は出来ないのです。私は常に、心の奥に永劫盡きざる淋しさや悩みを覺えます。華やかな色彩や感覺をそゝる様な、シーンに身を置いても依然として、私は淋しい北國人であります。

青い田畑や人屋離れた森の中に、獨り熟慮するときは、ゴリギリの「ふさぎの蟲」のチホンの様な遺瀨ない、暗い心になります。これが私には一

睡に、涙を泌ませ候。赤い軒燈の並ぶ湯の町の家には、旅に疲れた、人々の幾多、二階の手欄に寄りて、町を見下せる、若き人等いづれも温泉に、どろけた氣分の横溢したるところに候。

蘆原の温泉

より

A君

同じやうに、若い血潮の、みなぎりつめた脈管に多感な官能を顫はせて、旅情を泌み泌み、味はつて行く……いつまでもかくありたし。様々な運命に、もてあそばれて、尙自から、其運命を破らんとする内感。そうしたバシヨチートに満ちた、思想に生きねば、眞の藝術は生れない。人生は、己である。これ善なりとも、惡なりとも、自から、眞を以て認めたる事に對して、眞を



離れてはならない。藝術家には、人一倍の自我があり、又それだけ、藝術家には、藝術家としての道徳がある。なくてはならない。私等お互の生活は、乃ち藝術であり、藝術は、即ち生活であることを、常に心に留めて行きたいと思ひます。……
自己は己を叱し、鞭撻してくれるものである事を考へて行きたいと思ひます。
……
私の旅の通信のいくつかを見られた事を嬉しく思ひます。私は毎夜湯に行つては、湯瀧にうたれながら、死人の様になつて、ボンヤリものを考へます。旅に疲れた、体を湯が傳はります。淋しい旅愁は、ひし／＼と身に迫つて來ては、何となく、湯を浴びる音に、忘失しかけます。

番苦しい、又一番なつかしい憧憬である。私は毎日森に行きます。森に行く度に私は、故郷の父母、兄弟、友人とそれからそれへと、考へます。その時、私は、偉大なる天地と、細々たる人間との間に、一種不可言約束様のものゝある事を覺えます。

沈黙から沈黙に、熟慮から熟慮に、馳つた終りは、私をして狂人の様に、聲を限りに呼ばせます。そして、私は悲しい淋しい、心地になつて、家に歸ります。

試験後の私の心は亦々悶え始めた。

私は、それを忘るべく、一夜のうちに歸省かたがた、寫生に出掛けようと決しました。私は、明日から旅に出ます。旅の通信や、スケッチのエピソール等、つとめて御送りいたす筈でありますから旅の有様を想像して下さい。

出發の前日（八月三日）

まなを

蘆原温泉より

湯の町の湯の香りに、蒸せる蘆原の街は、愁人の

越前路の原野に、かすむ緑の、はて遠く、加賀への國境山脈は、頂上を雲界に没しています。旅人の姿は、様々な人々によつて、彩られています。私は總ての、人間と自然界に、またがつた、あらゆるローマンスを謳つて行きたいと考へます。

旅？其處には美しい夏の緑と、秋の花の凋落の悲哀がある。私等は總ての物象の「悲哀」をかんじた時に、詩や繪を作り出すのであります。

いく山河越へさりゆかはさみさのはてな

入國を今日も旅ゆく

牧水

こんな旅の歌があります。

三國港より

三國と申す所は、蘆原の近く、一里半ばかりにある、港であります。小さい町が、瀬戸の様な、河を控へて、夜は船つきの、こうした、海の觀樂境をなすのであります。私は、昨夜海の見える宿で夜を訪れました。

北國海岸の、藝術的に、匂やかな、色彩を含んだ所は、總てロウマンチックな情調を湛へた船つき

の夜にあると思ひます。

越後郷の津の旅より(第二信)

三國港を出發したのは、昨日の暮でした。

雨の夜の港の町は、泣きながら更けていつた。港の夜を彩る、赤や青の信號燈が海面を彩る。船はその夜もおそく、追分鏡浦とを經めぐつて、夜明け頃、此の地に着きました。私は、船を下つて、今は、此淋しい漁村に、居ます。

此處は、漁夫と百姓許りの、極くあれ淋しい、而も自然の異常にして、美しい漁村です。山には、百日紅と、青い無花果の畑が、ゆるい豊かな谷の傾斜に沿ふて、丘から谷に、谷から丘へと絶えては續き、名も知れぬ花と、百日紅は、今一時に咲き初めています。

陰氣な北國の、こうした漁村の八月は、——無花果のなる村の夏は、咲く花の様に、咲いて行くとする。

夏は何處からともなく、訪れて八月の熱風に、なぶらる、草木の緑には、熾烈なる陽光に、溶けて

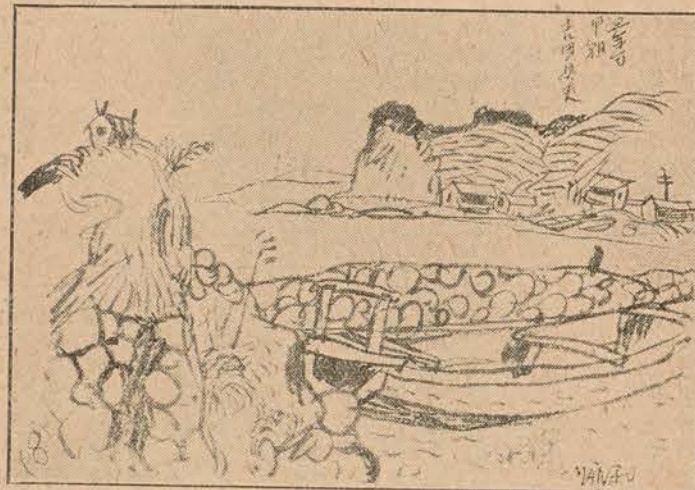
ゆく、色彩と光が、この透明なる空氣を透うしてまたたいてゐる。

私は今日始めて、この不思議な村の異常な、光と色彩を含有した自然に吃驚しながら、靜かに、細かな洞察を極めた。そして、詩や、繪に、表現したい、希ひの一時に、昂然として、私を襲ふて來たのを感じました。

私は、こゝで、此豊かな、無花果の園の、八月を、心ゆくまゝに描きたい心算です。

まだ、村の多くを、歩みませんが、人間の生活や、自然が純朴な所から推察して、藝術的收穫の又豐饒なるべきを喜び信じております。

村には、物品を商ふ家、即ち商店と云ふものは、二三軒よりありません。湯屋もなく、菓子屋もな



く、床屋も、小間物屋もない、それは、あれ淋しい村です。しかし私は、今それを求めて來た。藝術上のある、尊い作品は、人類自然の純朴な、單純生活裡に生れるから。

八月十二日 まなを

郷の津より(第二信)

私は、其後、百日紅の咲く、漁夫の薄暗い、二階に潜んで、毎々山へ行つたり、海邊に出て浴びたり、夜は、海邊の砂地に、腰掛を出して、村の小供や、娘を集めて、色々な話を聞かせたり、村の傳説や、俗謡を聞いたりして、淋しく更けゆく夜を、漁夫の二階に、物音しない靜寂のうちに、私は、色々な空想と

幻影の夢を辿ります。昨日は、村の小供と、山に登りました。山の畑を五丁はとも登ると、一つの

丘の頂上に來ます。

無花果畑の、青い波が、大きくうねり、名も知らぬ、白い花が凋んである小徑に、今し子守唄がきこえる。

丘はなほ續いて、高く山の峯へかかり、小松の林や、雑木林があります。

夏を唄ふ蟬の類が、賑やかに、啼いてゐる。つと見下すと波！青い波、沖に見える白帆、漁舟。

青い無花果畑から、岬へと續く赤土の斷崖には、所々に、血の様に、赤い百合がある。赤い百日紅が、岬の道に續いてゐる。

私は、村の一人の小供と、毎々山へ上り、そして丘から谷へ、谷から海邊へと、下つて行つて、その砂濱に伏しては、聲を限りに歌つたり、自作の詠草を、白砂にかいたりして、時の過ぐもの知らずにおります。

夜になつて、村の低い家並が、山の無花果畑から暮れて行く頃、私は、よく山の百日紅の木の下に行きます。そして、黄昏日の、薄れゆく色彩のものの悲しげな汀に、漁舟の散らばり、漁夫の姿の點

京都に、繪具補充に參り、出發したのは、四日早朝、丁度後の祇園祭りの、賑やかな祇園ばやし、美はしい癡都の、過去の夢を謳ふ様な情調に心をゝらるゝ朝、都を去つた。小生まづ、鯖波の家に歸り、數日を親族廻りや、寫生等に費し、蘆原、片山津、三國、越後の郷の津等を歩み歩んで、今は此地に、七日近くも滞在しております。

二十一日の朝から、大海をめぐる、木の葉の様な汽船にゆられ、越前岬の絶端に、忘れられんとする、鰯漁師の一團、それは、荒れ果てたる鹿浦と云ふ一村に、船を棄て申し候。村の家並は低い荒れはてたるものながらも、街は十字形をなし、道幅も豊かに候。小生今朝「散髪用事」と云ふ、異常な板に出喰はし、大失敗いたし候。村人の話に依れば、一週に一度、武生より理髪師を雇ふとの事に候。斯様な異常な所は、未だ澤山あります。藤島村にも永平寺の附近にもあります。B君。私の郷里、北國の田舎に、南國の暖かい文明の恵みに浴するには、まだ長い年月を要するを思ふと、私は、不可言悲しい、淋しい憧れを禁

々として影のようなのや、提灯さげて、濱邊を往來する、無花果買ひの男や、大海を往來する、屋臺船が、黄昏の暗に、帆を巻いて、眼界を消えゆく様なすが、皆うら若いロウマンチックな憧憬を湧き立たせます。

私は、今この淋しい人間の生活裡に、様々な觀察を恣にするにしています。

孤獨と寂寥！それは、ついに旅人の身邊をはなれないでしよう。漂ひ止まぬ、私の心は、常に異常な自然と、無智なる人間の生活中に亂入しようとしています。

私は、明日一まづ三國に歸り、二十一日頃から、越前岬に渡る筈です。

八月十九日

まなを

鹿浦より

B君

朝夕は何となくうすら涼しき頃と相成り候。小生去る四日より二十四日あまりも、旅をつづけ、こゝかしこと、旅から旅に、漂浪いたし候。

することが出来ない。私は、こゝで十五號のカンバスを塗るべく、毎日毎日海邊に出て、熾烈なる陽光に射られながら、努力いたし候。鹿浦と申す所は、それは、不思議な傳説的トラジションヒブリミタイブな風物が、第一に私の心を捉へ、私の心は、總てに對して、驚異の瞳をみはらして、よく洞察せん事を感じ候。

大海の怒濤、潮の泡沫、斷崖絶壁の連る海邊の景色が、如何に、私のスケッチを肥したかを考へてくれ給へ。

岩をよちて、燈臺に辿ると、赤い思い百合が、眞晝の吐息に喘いてゐる。漁夫の群が休んで岩に腰を掛けて休んでゐる。私は、貧弱な運筆を以て、此偉大なる、自然の神秘に對して、靜止する事が出来ないほど、強い感じを覚え申し候。以下畧

八月二十六日

まなを

杉津の旅舎より

船つきの、山影に、ちろめく敦賀の灯光は、ものさみしく、旅舎の二階に靠れて、あかす眺めいる

旅人の心には、遠い國の小唄に、旅の情感を一入
うるませ候。

琵琶湖一周藤栗毛

第四學年甲組 馬場 石城

琵琶の湖はその風光の美、富士の高根と共に、古
來詩人に愛せられ共に名高き歌枕、實に我秋津島
の花なれや。

あゝ花なれや琵琶の美、花なれば香もあるべし、
幾多の歴史はその香となりさらに湖國の史跡に豊
かなると共に芳ばしき香をはなてり。

色も香もある琵琶の美よ。かゝる名湖の在る國に
生れ近江の我等、まして中學生として湖岸一周の
必要の感起らざるや。我此所に一周記を書し併せ
て諸君に此舉を鼓吹す。あへて自慢にあらず、我
田引水にあらざるなり。

時や維れ、大正三年三月末の五日。疋田君小野君
に我の三人、一瞬千里とは自惚れながらいづれ劣
らぬ健脚家。小倉の服、草鞋脚絆とは我等の旅装
の御定り文句。必要品を鞆に押込め、防雨用の外

冬なかく野はなりにけりあふみなる

伊吹の外山雪ふりぬらし

と去る人も詠じけむ。なほ春淺くしてむらさきべ殘
る峰の雪時に面白し。長澤村に至り、西本願寺御
坊福田寺にその由來を聞き得たれどもくどくし
きのみにてあまり趣味もなき事共なりき。田村を
過ぐる途中道草して田村山の麓に建てる多田幸寺
を尋ねて開基を知る然れど此所に略す。かくて長
濱の客となる。日比より親しき淺見兄を訪ね卒業
の榮を祝ふにつけても我身の今日の恥しさ、先づ
互に身の健全を喜び、四方山の話に事つきされど
先を急ぐ身にしあれば惜しき袂を別ちて去りにけ
り。此時は我のみにて他と奉公園に落ち合ふべく
町の入口にて左と右と道をば取りしなり。我は思
へば御苦勞にも長濱農學校々内一覽の後八幡神社
に參拜なして郵便局に立ち寄り飛鳥の如く奉公園
に急ぎ走せたり。

春風千里過湖傍 拍岸餘波濺客裳
洗蕩天隨山盡所 依稀島在水中央
鷗聲隔霧聞纔辨 帆影入雲認却亡

套、左腕には我等が主意を世人に簡單明瞭に告げ
むがために「琵琶一周」と萌黄に白抜したるを結
び付け、威風堂々愛馬藤栗毛の歩み勇ましく彦根
を後に旅の第一歩を踏み出したるは午前十時半。
佐和峠の坂を越え鳥居本に至れば道は中仙道に投
ず。郵便局及神教丸本舖有川氏宅に立ち寄り山田
神社に前途を祈るも喜し旅の身はそれ、通過證
明に記念の印を受け再び中仙道に出でたり。矢倉
川渡れば道は追分の「右中仙道、左北國路」と道
標に刻みあり。吾等左して斧を磨きし摺針の峠の
茶屋の瓦を右に眺めつゝ桃花咲き亂る甲田の里を
過ぎ、米原に入る。局に印を得て、汽笛炭烟絶ゆ
暇なき停車場を横目にかけつゝ進むがまゝ、天の
川、宇賀野の野邊をさすらひて、仰げば高し伊吹
山。のどかなる春霞に包れ巍然と聳ゆる靈峰、八
重の汐路に思ひ入り給ひし名も橘姫の貞烈と共に、
武勇の御名千秋に芳しき日本武尊を初め奉り、
尾張の浪人野江彌八が蠻勇の快談さては石田三成
が哀れを止めて少なからざる歴史を有し、かつま
た古より和歌にも詠まれ

驛路馬蹄倉卒去 不能留賞苦相望

伊藤坦庵の吟詠「長濱春望」と題す。時は同じ春
風に汀に寄する小波、多景の一青累己が友呼ぶ濱
千鳥、歸帆の点々眺め見あかなく景色かな。此地
はかつては秀吉居城の所、ため人稱びて豊公園と
す、そのかみの小松今は老松濱風に颯々と古を弔
ふ。

君か代も我か代もともに長濱の

まさこの數のつきやらぬまで

と築かれ世に時めきし巨城すでに後方もなし、誰
かあはれと夕ぐれの入合告ぐる鐘の音波間にひ々
き渡り夕風身にしむ時一笛一聲漁船は炭烟を長空
に残して靜に港を去る。燦たる電燈の光輝く時、
公園を後に、明日は九時を期し虎姫停車場に集る
事を約し、我は長濱在なる一小村の竹馬の友をた
づねけり。

その二日

「君よ健なれ」、「いざさらば」。村端れまで送りく
れたる袂を別ち伊吹の山の春風に征衣を翻し十里
を後に虎姫に我鐵脚を運びしは二日の旅に辰の

刻。一里ならずして姉川の流れあり。思ひの外に川狹し、旅人の注意なき時は知らずで渡り越すべし。

姉川 一

玉乃五龍

長流汨々遶原田 萬頃纒繩斜日天

龍拏虎攫知何處 一劍秋風渡姉川

進みて郵便局に印を収め、停車場に至れば二友驛前のとある店前に腰うちかけ草鞋の紐を結び居て用意備ひたりき。暫し休すらひ、小谷山城趾を弔ふべく出で立つになつかしや金龜白線帽に會す、是れ野瀬君なり。近き邊りの歴史を聞きつゝ、一町も歩みけむ、右と左に相別る。今日の空模様快ならで近來になき餘寒の烈しき雪さへ降かねまじき日和なり、一小村を過ぎ切通しに出で八相山に登りて峰の社に休む、八相山は虎御前山の突丘にして「式内矢合神社」あり、かつては小谷落城姉川の決戦に數度陣幕の張られし所、やがて山を下り十町餘伊部村に入りぬ。たゞちに、布施定治郎氏を訪ね小谷城史に就き問ふ、氏は小谷城博士の名あり、いつぞや新聞記者琵琶湖一周競争の時之を案内せし事もあり、今我甚だ多くの史料を得てか

し方に進む、はたせるかな神に祈るきゝめのありかたや此所に一人の樵夫の出で來りて事も委しく教へ地圖を活用なし得る事を得たり。老樵謠曲なればかき消す如く去るならむ、まして勇士の眠る劍の夢茫々三百有餘年出で之れより城趾を親しく弔はむを。先きのや、廣平坦の所に立歸る之れ金吾丸左に二町山頂に至る本丸なり。背は斷崖巖石屹石なして凡そ直角、腹は谷深く手足の小丘亦高し今の戦術としてはいざ知らず昔にては所謂難攻不落の堅城なりしか。淺井三代の夢の跡たゞ巨石の空しく荒草の内に残るのみ、御馬場の跡、御廣間城主長政の住みし跡弔ひつゝ進めば御局跡のあり。此所には小谷の方を初めはつ子、ちや子、のぶ子等の生ひ立ちし所と萌え出でし若草ふみわけ苦むす石にすべりつ、京極丸賊天丸一の丸二の丸三の丸の跡ふみて小谷崎に出で、踵を歸す。その音歸るさ小笹に風さわぎ、細き春雨緑に注ぐその音去きて歸らぬ兵の幾千萬の鬼哭の籠ると意自づと啾々たり。

日本晴英雄の資を備へながら小意氣地の爲めに倒

つ百聞一見に如すとの例のまゝに古城趾繪圖を借り受け小谷山にと志しぬ。小谷山はその名に似ずなか／＼に道複雑にして山また高く深し、誰とても此所に登りし人の道に迷ひ苦しむたりと云ふ人の多し我もその一人初め一歩々々と登る數町道ついに／＼に細くなり行きてついには道のそれらしきものなくなりぬ。こは道を間違しならむと下りて岐路に入る之れまた同じまた歸りて進み進みては歸る、前後四回、道の判斷さらにつかす急坂を上り下り最早や來し方だに何れ道とも判明せず此所に於て私の性狀後は野となれ山となれ野猪の勢ひ驀地に走り出せり。さらに數町や平坦なる所に來りぬ。亦岐路あり。いづれに行くやを苦む手に繪圖を持ちながら昔の様なれば今當らず、歸らむとする今の様、かつ登山中止の二人は山麓に我を待てり。小谷山中に進退谷りて心なやまず、いづれの道も數間程進みさまよふ内にはるか麓に三ツ四ツの家見えければ道のいづこを聞かばやと先づ右手を進むを路亦三ツ筋、最早や野猪の勢ひもなくひたすら神を祈り分岐點に杖を立てしばし念じて倒

れたる淺井長政はあはれなり。一度佐和山城に織田信長と會し、越前朝倉氏と相争はまじとの誓書を取りて——淺井は備前守亮政の時より朝倉氏とは永世同心の盟約あり——信長が妹なる市子と婚して契深き義兄弟の縁を結び、二度佐和山城に會盟して京都經略の策を議し肝膽相照共に媒る所ありき。さるを、表裏反覆無きは戰國の世の常ならひ、時は元龜元年春なかば織田勢越前侵入の報小谷城に來る、突！怒髪立つて天を突く淺井の憤怒織田に義絶を送りてついに姉川の決戦、六月二十日雌雄を決して武運拙く唐紅の波を擧ぐる姉川の河面を夕陽の彩る頃無念の涙を揮ひて馬の歩みも力なく小谷城に歸る。長政かくて四星霜、銳意再擧を量りしも敗戦に深く内腔まで入りし小谷城の重傷を如何せむ。四年葉月十三日先づ義景亡び、二十八日さし者堅城一拒の烟と化し終はむぬ。淺井父子の自殺や恨みは長し今やその菩提を弔はむに一片の碑なく墓もなし、あはれ國は亡びるも山河はあるものを、英雄の末路恨綿々。塵に致り握飯を喫して腹を肥し、二時半頃伊部を去り木之本

さして急ぎぬる。馬上村雨森村過ぎて木之本の宿にたどりつく、藤原君にて相待べしと地藏堂に指づ聞きしにまさる境内堂宇の壯麗、之れはまた意外。我聞くなり此の地尊に小便の開眼關の地藏我犬上の大瀧の地藏の三体は、同木にて作り、此の地藏はその木之本なる故に里の名となる。緑范を聞けばさもあらずにありがたの事共に南無や大悲の地藏尊、尊き限りと思ゆるも藪をつけば蛇も出づ、ありがたみもあり度を越せば御伽話と類を共にせむ、世人の告げつゝ眼病平癒の効め、あらたかと、迷信にあらず、實なる事を信ず、されば眼科の醫學博士の列に入れては亦如何に。寺を辭し藤原君を訪問するに頑張り居る二人今宵は磯野にたどるべしと云ふ、磯野には上松君のある在り。賤ヶ岳の古跡を委しく知り得むものと大音村に林源内翁をたづぬべく一歩早く藤原君に別れを告げ夕雲たなびく頃はひ賤ヶ岳の麓なる翁が住居を訪れぬ。來意を告げて明日の朝また來訪せむ事を契り、宿れとの親切の言葉も約束あれば舍はすして去る。余吳川つたひに磯野に向ふに日

は暮れはて、春雨に白雪さへ交り征衣いたくぬれ磯野に着しは眞の暗、すでに二人は待ち居たり。過ぎ來し方や行く先の調とに枕に着しは一時鳴りての後なりき。

その三日

明ければ二十七日。朝の八時の起床、寒さいたく身にしむ。門邊に出づるに、見渡す限り白雪にて被はぬ所なし。櫻の咲くのに雪が降る此所等あたりは湖北故かと「雪のはて涅槃とは申さずや」と聞けば家の人の答へて「申すべしこは近頃稀なる雪にこそ」と、されば湖北の寒さの故にかく雪の降りしとも思はれず、かゝる不事に近江の琵琶湖一周は血氣の我等には寧ろ愉快なり。

去る程に仕度整ひ厚く禮をのべ磯野を急ぎ出しは旭光余吳の川邊の淡雪に輝く九時。大音村に昨日の源内翁を問ふに黃石公ならぬ身のしばし憩ひ給へと朝の膳に向はれぬ。

翁が食事のその暇に餘白を許せ翁を語らむ。七本槍にて名も高き賤ヶ岳の麓の村々にて源内翁を知らざるものはよもあらず、翁は賤ヶ岳戦記に精通

なるを以てかくは名高し。さればかつては畏くも久邇宮殿下の賤ヶ岳御登山に際して御先導の榮を受け敦賀聯隊より數多の青年士官の來て戦史を研究するや先づ翁を訪ふ。その他苟も賤ヶ岳をくはしく知らむと欲するものは全て村々にて聲き翁をたづね來るなり。先輩野間氏亦來訪の後ありき。

翁の性狀。我等學生の史蹟研究のため登山するにあたりその案内の勞を取るに吝ならず我等學生の感謝の至りなり。翁が道樂は骨董品にあり。貯藏の七珍萬寶、我等口黃若輩の子以て論すべき力なし、書畫中岡部多賀宮司の筆の跡他郷の空にてなつかしく如何にしたるやを問へば宮司の來訪ありしとか、尙ほ語るにつきざるもあへて必要も無き事なれば。

とかくする内いでつれ立たむと出で來り「案内なれば御免」と前に立ち登るや七十に近き老の坂、竹の杖鴉色のデント。天鷲絨の頭巾皮草履、後に従ふ金鬼健兒、勇む草鞋に消え残る雪を踏みわけつづら折りなる山路を半里にして或は休み或は語り或は残雪に喉を潤しついに頂に達す、紀念碑一基

物淋しげなり。山上の遠望、常に金龜城頭に突立ち伊吹の山色の美琵琶の水光の美を壇にせる我目にはさのみとは思はれざるも三明鏡の明媚越山の壯姿伊吹の雄偉天下に承會するも恥しからぬ氣色なり。

嗚呼かつては余吳の湖に立つ波も唐紅ひに染められけむ、屍の山を築かれけむ賤ヶ嶽、しづのおだまきくり返し三百幾餘の春秋を経にければ何知る由もなければ廣世の英雄筑前守と當時名を天下に響せし鬼柴田とが堂々たる大猛闘を演じたると思へば廣望低廻轉た感慨に堪えざるなり、七本槍の勇姿、三振太刀の奮闘、清秀の最期、青木、阿閉の決戦、佐久間の偉風、毛受勝助の美譽、柴田の悲憤などで我等が青春の血汐を靜止すべき、まして翁の説き出づ軍談に身はあだかもその戦闘中にあるが如く肉躍り腕鳴り大活劇は現に浮ぶなり。賤ヶ嶽戦記の材料豊富なるに、限りある誌上なれば一度稿を草しながら記載かなはざるを千秋の恨事とす。

翁語り終はるや行く先き道を委しく告げて麓をさ

して下りける、後に残りて我等三人いたくその勞を謝すなりき。

あはれ織田信長が宿將中つとに軍功多く明星と仰がれ龜破り柴田鬼柴田と百々の戦に勝家も「地利不如天時、天時不如人和」と孔明の驚句よく穿たれて盛政の失敗にけふはあへなく敗北の心のうちぞ如何ならむ、故國北之莊に四面楚歌の聲を受け城に火をはなちて日本晴の最期その白髪頭秀吉が面前に出でし時、我娘淀君に依りて豊公の業破壊するを念じたる乎。一榮一落之れ春秋よ。

人は武士花は佐久間玄蕃盛政越前山蓋世の快男兒、八尺有餘の鐵棒を提げ立つたる威風、いかに壯なりしか、さはれ風勵卓發天下一統の利器物天の命に向ふ所に敵ありや、當時の天下の形勢一見して秀吉の此舉常理を以て論するべからざるなり。いつかは枯るゝ秋の草勝家に仕へて碌々として完からむより玉とくだけて花と散る男子の本懷蓋し痛快。君不見管鮑貧時交、いかに表裏反覆常なき戰國の世の習ひとは云へ慾に迷ひて北軍にあし引きの山路將監正國、母や妻子のあはれの最期正國自

けがれ、血氣盛りの旅人なりと鹽津を後に岩熊峠の突破、

鹽津山うち越え行けば我のれる

馬そつまつく家戀ふらしも

ためにその昔馬の通ひし事もあるべし鹽津山一名岩熊

知りぬらむ往來にならず鹽津山 紫式部

世にふる道はからさきものと

岩熊峠を越えし頃はひふりくるみぞれ烈しきその間を半里許りも歩みけむ小學校の建ちたる所より道を右に隨ひて早川を渡りてとある村里に踏み入りぬ。土人に問へば上下五十町全て急坂と、何かあると思へば思ふものゝ山中に日の暮れなば如何にせむ、誠けふの豫定は大浦の一泊にて越え行くは明朝なりしなり。降る雪は尙ほはれず。決然立つた彦中健兒、金鬼魂の玉を磨くに好機會踏み破る千山萬岳の夕煙たな引く時晝尙ほ暗き森をくぐりて短草のみ茂る細道に出づ旅人としては通ふ稀れにして草かり人の通ふのみ夏なれば一種の惡蛇の出ずてふ諷ある所なり。をりしも一陣の風と共に

身手を掛けたるも同じさはさりながら一世の快傑清正と雌雄を決して討死なしたる天罪輕し。乙女に見まく花の紅顔美少年三世を契る主に交つて討死は彼の村上彦四郎に比して名譽なりまた可憐なり毛受勝助、忠と義とに一身を賤ヶ嶽大岩山の絶頂に輝く名碑は今も尙我等の士氣を鼓舞する基なれ、快なるかな中川清秀偉大なるかな清兵衛清秀誰れに誰れと評しつゝ後吊ひて消え残る雪に轉びつゝ、賤ヶ嶽より猿ヶ馬場清水峠と下り行き、飯ノ浦にて一家に晝食を終へ此より三大嶮所を踏み破らむと草鞋の紐を結び交ふ。湖水一周中最大嶮所地獄谷、岩熊峠(ヤノクマ)に越えの行く手に横はりて我等の健脚振りを試むとす。先づ鬼の住むてふ地獄峠の急坂を踏破するに春の淺きため寒風吹けど尙汗の瀧なすばかり流れたり。下り終りて小田の細道をたどりて數町旅はからき鹽津濱に着す。一時世を騒せし運河設計問題は如何になりけむ敦賀よりは二十米突琵琶湖上軍艦の威風を見受けるべきものを。やがて汽船來るべし西江州に舟便を以てせよと注意を受けたるも琵琶湖一周の名の

吹雪！吹雪！

雪降らばこそ我々の勇氣を此所に試してみむ！凛々たる聲寒氣を破りて山谷にひびき渡る、數度ころび喘ぎ／＼つゝ折りなる山路を上るに刻々に黄昏れとなり遠寺の鐘はかすかにひびき、入合ひ告ぐる諸行無常。時に至れば頑として物言はぬ地蔵の石尊あり、之れより道は下り坂、谷川の流れを渡り、森をくぐり麓につきし時は春日くれはて雪はみぞれと化して降る、ます／＼はげしくなり行きて人は皆我家々々に歸り行く黄昏れ時は旅ぞ悲しきとかねて覺悟は敷島の

あらち山雪消え空になるまゝに

かい津の里にみそれふりつゝ、

と大和言の葉詠は誰れ、さながら我がため詠みにしものと歌の心も思はれて海津に着せし時は身も心もつかれはて、時正に八時。

その四日

情も厚き村人中村善六氏に感謝の禮に別れを告げ海津を出發せむとするにあたり、世に隠れたる英雄大松大貳が奥津城を弔ふべく正行院を訪つれ

ぬ。來意を告ぐればうれしげに老僧の出で來りて
維僧に案内を命ず。裏手の山を維僧と共に一町あ
まり登る時熱血男兒大平大貳の永久に夢見る憤基
の地に來りしなり。基石、弔碑の二碑あり、やゝ
ありて心を静め帽を被ぎいとねごろに弔ひぬ。憤
ひ出ずも悲憤の至り、維新のその頃尊王論を稱へ
し志士の幕吏のために恨みに曇に己が首を斷れし
は、大貳亦尊王論者の堂々たる者のなりき。慷慨
の志士なりき。時を得ば花々しき請を立てたら
むに身は正道を踏みながら武運拙くなす事交啄の
はしとくひ違ひ報國盡忠を誓ひし腰間の秋水縁は
いかに短かりし事よ、人生わすか五十年に滿た
ずして男の腹の一字花々しき最期にその紅の熱
血はあたり飛走り、正行院が奥の間の襖を染むる
血汐となり、後世に名も芳しき誠忠を傳へしに近
年に到りてを捨てられたるは恨むべきかな惜むべ
し。貴き血汐はけがれたると思ひ淺き人の仕術に
出でしなり。

明治三十一年朝廷より從四位を贈られ今また地方
の有志今年九月の五十忌にあたるを以て紀念祭を

君に捧げ國家の干城たる軍人はその精神のいか
に、我等薄志弱行の物また感や多大なりき。途中
安曇川を渡り今津より一里半一肢路ありて石柱立
ち左二十五町にして藤樹書院に至るを示す、玉林
寺に三碑あり藤樹先生、中江徳右衛門妻北川氏、
常省先生の墓とある常省先生とは中江藤樹か三男
なり。近江聖人の名と共にその傳記また世人多く
知る所即畧すも男兒立志郷關を出で學成り名遂げ
業は終へ君をはじめ世の人の信を得るいかに愉快
なりしや、さばれ「樹欲靜而風不正。子欲養而親
不待」の一句を讀みて愁ひの雲は下り忠と孝とに
身を堪へかねて料し縁すて官をすて孝は萬徳の基
と自が主義を取るまた快なるかな生れ故郷にわび
住ひ、孝を盡して民をなで、ついに慶安元年八月
二十五日四十一歳を一期として永眠に着く、名は
千載に芳ばしく今は正四位の榮を有す。書院の案
内を乞ひ許されて一見身は勝野に向ひけり。道す
がら村々に機杼の音に花やかなる歌の音に旅の身
をなぐさめ勝野の客となる。

何所にかわれはやとらむ高島の

舉げ碑を同寺内に磨く天何を無情に英雄の名を暗
に弔るべき大貳亦冥すべし。碑文の銘曰
竭忠誠以護君 遭時難而致身 英魂永享生廟
峻節夙達天閭 豐碑深刻義烈 巍然琵琶湖濱
海津を後に鐵脚に鞭打ちて二里、今津に達着す、
饗庭野兵營（バラック）の縦覽を乞ふ、願ひ許さ
れ小林砲兵少佐殿に導れつ毛布室兵舍酒保食堂浴
室將校室等を見終る。かく列記すればいかに結構
調ひたらむに思ゆるも節儉を旨とす軍人の精神を
極端に形色に現はしてすこぶる殺風景なるものな
り、やがて兵器格納庫に導れ數種の砲の説明を受
け終り、少佐殿は尙我等を顧みて「是非君等に見
せなければならぬ所がある」と案内せられたるは
以前と變る事なき一室「此所は久邇宮殿下の御室
であります。彼の貴き御身でありながらよく三
年間此所に御心棒なされ」と一寸息を切りて「朝
も早くより夕べ汗を流れて御歸りになる事は毎日
でありました」教訓のくれぐれ「先づ之れだけ」と
再び事務所に歸り別るゝ時も「尙今の事は歸られ
てからも外の生徒にも話す様……」あゝ一身を

勝野の原に此の日くれなば

勝野また大溝と云ふ近き邊に我痛快男兒近藤重藏
の墓所あるものを時を得ず通過せしは殘念千萬。
一里あまり湖邊をつたひ立ち寄る波も白髭の神居
に早く着きにけり。山紫に水清く山と湖と接する
所に建つ宮居の風光亦さらにして昔の人の詠みに
し詩歌多く此所謠曲白髭の一節。

地瑞垣の年も經にけり白髭の、年も經にけり白
髭の、神の誓ひは今とても、變らざりけり、
實にありがたや頼もしや。われは心も波小舟
釣の翁の身ながらも、安くたのしむ此の時に、
に生れあふ身はありがたや、生れあふ身はあ
りかたや。それ此國のおこり家々に傳はる所
おのおの別にして其説まちまちなりといへど
も暫く歸する所の一義によらは天地既に分つ
て後第九の滅劫の人壽二萬歳の時シテ迦葉世
尊西天に出世し給ふ時。地大聖釋尊其祓記を
得て都卒天に住し給ひしかシテわれは相成道
の後遺教流布の地いづれの所にかあるべきと
て地此南瞻部州を普く飛行して御覽しける

に漫々とある大海の上に。一切象生悉有佛性如來、常住無有變易の波の聲、一葉の蘆に凝り固まつて。一ツの島となる、今の大宮權現の波止土濃なり。其後人壽百歳の時、悉達と生れ給ひて、八十年の春の頃、頭北面西右脇臥拔捷の波と消え給ふ。されども佛は、常住不滅法界の妙体なれば、昔蘆の葉の島となりし中つ國御覽するに、時は鷗草葺不合の尊の御代なれば、佛法の名字を人知らず。こゝに比叡山の麓。さゝ波や志賀の浦のはどりに、釣を垂るゝ老翁あり、釋尊彼に向つて翁もし此地の主たらば此山をわれに與へよ、佛法結界の地となすべしと宣へば、翁答へて申すやう、われ人壽六千歳の始より此山の主として此湖の七度まで蘆原になりしをも正に見たりし翁なり、但し此地結界となるならは釣する所失ふべしと深く惜み申せば釋尊力なく今は寂光土に歸らむとし給へば「時」に東方より地「淨瑠璃世界の主藥師忽然と出で給ひて、善きかな、釋尊この地に佛法を弘め給はむ事よ、

われ人壽二萬歳の昔より此所の主たれど、老翁いまだわれを知らず、何ぞ此の山を惜み申すべき、はや開闢し給へ、われも此の山の主となつて共に後五百歳の佛法を守るべしと固く誓約し給ひて二佛東西に去り給ふ其の時の翁も今の白髭の神とかや」。

拜殿にしばし雨宿りなしけるも、いつかな／＼降り止まず、雨を排して行くまゝに漁火點する時名さへやさしき小松の宿に着きにけり。七寸の鞋の紐を解きあへす今宵は此所に旅寢の夢を結びける。

駄文いたすらに長く一時此所にて筆を止むるも、要するに旅行の地理を調べ史跡を探るに必要な云ふも更なり膝栗毛に至りては志氣修養に多大の効を見るべし。山岳跋涉或は夜行時に雨中行進共に可なり。よし世の人の匹夫の勇と云はゞ云へ君聞かずや三石白水が最後の激言。青年の志氣は野蠻的行爲に依りて養はるものなり。今や天下の形勢の如何に、皇國の風雲また急なるにはあら

すや。見よ、千軍萬馬の大活動世は永久に春ならず劍とるべき秋は來ぬ、我等やがては護國の干城たる中堅國民となるべきものゝ治安の夢に耽る秋にあらず。

立て！振へ！我親愛なる彦中五百の大丈夫！（畢）

車 上

第四學年乙組 仙 波 健

列車中の人となつてから僅かに四十餘分。北陸線の一驛を今し方出て來た私は又もや俤上の人となつた。

伊吹まで四里弱。其の山は東よりは少し南にかたよつて變挺な形をして居る。

兩側に列んだ運送屋、仕度所、水菓子屋、俤屋などの中を通り抜けて右に曲ると、三等郵便局がしよんぼりと立つて居るばかり、あとはもう直ぐに郊外だ。

一体私は何の爲めに斯んな所を通るのだらう。此所から一里半伊吹の方へ行くところには私の叔父の家がある。私は暫くの間、其所で田園生活をし

やうと思つて居るのだ。

と見れば、右も左も多くは黄ばんだ稻田、早魃だなどと思ふと直ぐに頭の眞上から直射する太陽を見上げる。早魃の時の特徴をよく示して居る。――

太陽は直射するにしても晴れ渡つた空からではない。途中で何か邪魔でもして居るやうだ。何となくどんよりと暑さうで、いかにもすつきりとした所がない。そのくせ日没頃になると、太陽は大きく眞紅の色に燃えて、朱紅の雲は山の頂を輝らし、地上の物何一つとして焼盡くさすば止まないといふやうな勢ひを示し出すのだ。

少し行くと兩側に梨畑がある。枝もたわ／＼になり下つた大きな果實、黄ろく熟したそして非常に汁氣の多さうなのが。

其所を過ぎると北國街道との十字路になつて居る。

一せんめしと折釘流で書いた障子を日除けに使つてある、馬方が三人休んで居て、今見たあの大きな梨を食べて居る。俤夫は砂畑を立て、一しきり走り出す。